



日本記者クラブ  
昼食会

## ミドルパワーによる戦略的調整関係築け

フォルカー・シュタンツェル 駐日ドイツ大使

2013年9月27日

冷戦後の世界においては、あらたな秩序がいまだ確立されているとはいえない。唯一の超大国となった米国は、イラク戦争以後、その国力に陰りがみえてきている。最近のシリア問題での迷走ぶりはそれを、はっきりと裏づける。一方で、アジアにおいては中国が超大国として台頭しつつある。しかし、その影響力はいまのところアジアに限定され、かつてのソ連のように、米国と世界的規模の問題で対峙、時に協調するには至っていない。そうしたなか、ドイツのシュタンツェル駐日大使の提案は興味深いものだった。日本やドイツのような、超大国でもなく、小国でもない「ミドルパワー」が緩やかな連携体制を構築して、問題ごとに、数カ国が協力し合って、解決に当たるという構想は、過去に例を見ない「最先端」の提案だ。4年の任期を終えて帰国する大使の「お別れ会見」は、感傷的なものになることなく、国際関係論を論じる教室のような雰囲気だった。(檜山)

司会：檜山幸夫 日本記者クラブ企画委員（産経新聞社論説委員長）

日本記者クラブ Youtube チャンネル

[http://www.youtube.com/watch?v=KuinyC407bA&list=UU\\_iMvY293APrYBx0CJReIVw](http://www.youtube.com/watch?v=KuinyC407bA&list=UU_iMvY293APrYBx0CJReIVw)

©公益社団法人 日本記者クラブ

**司会 榎山幸夫・企画委員（産経新聞社論説委員長）** 本日はフォルカー・シュタンツェル駐日ドイツ大使をお迎えました。大使には、過去2回ほどおいでいただいておりますが、このたび4年間の任期を終えられまして、10月に離日をされるというご予定です。本日はお別れの記者会見ということになります。

大使はご自身で「大使日記」というブログをもっておられます。お人柄、おひととなりをよく伝えられていると思いますので、それを若干ご紹介をさせていただきたいと思っております。

「ドイツ大使のフォルカー・シュタンツェルです。日本は3度目で、最初は京都大学に留学しました。次に政務・広報担当として日本で3年間働き、2009年に大使として着任しました。京都大学に留学したときから合気道を続けています。座右の銘は『知行浅薄（ちこう・せんぱく）』。日本は私の二番目のふるさとです」と完璧な日本語でお書きになっておられます。

補足をさせていただきますと、大使は1979年に外務省に入省され、これまで中国大使館勤務が2回、日本勤務が2回。前任は中国大使で、ちょうど4年前、2009年10月から駐日大使を務めておられます。

ブログは、東日本大震災が発生した直後の2011年3月23日にスタートいたしました。ちょうど2週間前の9月13日、84回をもって最終回を迎えました。

第1回の文章をご紹介したいと思います。

『日本人はつらいですね!』と、妻が東北関東大地震のすぐ後に言いました。妻が気づいたのは、日本人はもう国の歴史の原点から自然の災害をよく知っているということです。

3月11日の後の深い悲しみ、今の日本人の『がんばろう日本』の精神を見ますと、私ドイツ人にもいろいろな思いが浮かんできます。

だからこそ、以前から考えていた『大使日記』を始めようと思っております。日本人の友達にも興味があればいいけど…」と、非常に友情に満ちた日記になっております。

帰国された後は退官をされると伺っており

ます。本日は、大使の4年間にわたる日本での生活、長かった外交官生活、いろいろなお話が伺えるのではないかと考えております。大使は日本語が流ちょうですので、日本語でお話しいただきます。

## 意義あった「日独交流 150周年」

**フォルカー・シュタンツェル 駐日ドイツ大使** いまご紹介いただきましたシュタンツェルです。4年間に3回も日本記者クラブにお招きいただきまして本当にありがとうございます。

4年の任期の後に何を話したらいいか、いろいろなことが浮かんでくるわけです。とくに離日の後にすぐ定年退職になりますから、この4年間の、いろいろなことを話すことができると思いますが、一番根本的な、政治的な考えを紹介したいと思います。

ブログを紹介してくれてありがとうございました。ちょっと恥ずかしくて、下手な日本語ですが試してみたいのです。

ドイツと日本は遠く離れています。優先事項も随分違ってきます。そして、この4年間に立ち向かった問題も随分違ってきました。日本の場合はもちろん、大震災でした。ドイツはそういう悲劇的な体験をしていませんでしたけれども、いろいろな問題がドイツでもありました。しかし、やはり日本とは異なっていました。

日独関係で一つの重要な出来事、経験もありました。2011年、12年に祝った日独交流150周年です。1年にわたる周年行事でしたが、そのとき私たちが経験したのは、日本社会の中の市民たちの関心でありました。

というのは、この1年の準備をしたときは私たち大使館では、この1年間に毎日、日本のどこかで一つイベントがあれば、それはもう最高で理想だが、それはできるはずないと考えていました。けれども、実際は1,000件以上になりました。そしてその大部分は、80パーセントは大使館が関係なく、どこかの組織、日独協会とか、どこかの大学とか、学会とか、そういうような組織が行ったものでした。だから、何か

共通点もあるのではないかとそのときから思っ  
て、ちょっと調べようと思いました。

### 日独ともグローバル化に依存

考えてみれば、ドイツも日本も成熟した先進  
国、工業国です。両国とも民主主義国家です。  
両国とも自由貿易を守っている国です。教育水  
準の高い、技術水準の高いレベルの国です。

そしてそれ以上に重要ですが、両国とも  
輸出に依存している国です。輸出に依存し  
ているだけではなく、資源輸入に左右されるリ  
スクも高いのです。だからグローバル化の働き  
に依存しているわけです。他国と一緒に作り  
あげてきたグローバル化の恩恵を両国とも受  
けているわけです。

そしてもちろんこの状態を続けたいと考  
えています。私たちだけではなく、新興国と一緒  
に、ほかの工業国と一緒に続けたいと考えて  
いるのです。このグローバル化の働きは、世界  
中の国々を全体的に含んでいるからです。みん  
なと一緒にグローバル化の発展、発達を維持す  
べきです。私たちはグローバル化の進む世界  
がうまく機能してくれなければ困るわけです。  
だから日本とドイツも多分、国として、このグ  
ローバルの世界に割と大きい影響を与える力が  
ありますけれども、同時にわれわれはグロー  
バルなリスクに立ち向かっているのです。グロー  
バル化が進んでほしいのであれば、そのリスク、  
その危険もはっきりとみなければなりません。  
グローバルなリスクの解決は、われわれにとっ  
て重要な課題です。

例えば新保護主義のような国際貿易体制を  
脅かすリスクです。また、資源の枯渇のような  
世界経済を脅かすリスク。また、各国の財政路  
線の違いなどによる国際金融システムに対する  
リスクです。それと、ご存じのような温暖化の  
リスクです。感染症、移民問題など、組織犯罪、  
大量破壊兵器の核拡散、地域紛争など…。つま  
り、いまよく言われているグローバルの公共財  
に対するリスクなのです。脅威なのです。

こういうリスクを解決するためには、ドイツ  
だけでは解決できない、日本だけでも解決でき

ないので、ほかの国と一緒に解決策を探さな  
ければならないのです。しかし、相手はどのあた  
りがよいのでしょうか。アメリカ、国際組織、  
BRICSあたりでしょうか。

### 世界は「無極」の時代に入る

もう少し詳しくみていきましょう。まず最初  
にアメリカです。いままでよい協力をしてきま  
した。それはドイツもそうです。日本もそうで  
す。そして、アメリカの指導によって続けば一  
番よいですけれども、最近のアメリカは内政の  
事情、また国際政治の事情により、これまでど  
おりのリーダー役を世界中で務めるのは難しく  
なってきました。ところで国際政治の事情とい  
うのは何でしょう。それは、何よりもアメリカ  
のリーダー役を認めがらない世界中のプレー  
ヤーがふえてきたということです。

また、アメリカ自身のリソースもだんだんと  
減ってきました。これまでどおりのリーダー役  
をそのまま続けられるかどうか、考える必要も  
あると思います。また、アメリカ国内でも、そ  
の意志が以前ほど強くないかもしれません。だ  
から以前、ブッシュ政権の時代ですけれども、  
有志連合をつくる方針にいきました。

第2は国際組織です。私たちになじみのある  
世界秩序は解体されつつあります。もちろん私  
たちは国際秩序がうまく働くことを望んでい  
るのです。国連など、うまく働けば、それは私  
たちドイツ、日本のような国にとって、一番よい  
状態です。しかし、現実とは違います。私  
たちは国連のシステムを改善し、新たな国際  
的な枠組みをつくっていかようとしていま  
すが、解体のプロセスが続いていくわけ  
です。例えばG20、東アジアサミット、  
中国とロシアなどの上海協力機構などが  
つくられています。新しい組織がぼ  
つぼつ出てきますけれども、基礎的な秩序  
の解体構造を、私たちは多極世界と言  
ってみたい、G2 という形で把握し  
ようと試みたりしています。そして  
実は私たちが結局みているのは、だ  
んだんと無極の世界になってくること  
です。多極ではなくて無極になってく  
ると思います。

それで国際法の一層の整備に努めています。

国際刑法もそうです。ハーグの裁判所です。海洋法もそうですが、これについてはハンブルクに裁判所があります。国内管轄事項への介入もこの流れの中にあります。しかしながら、実際はこういう新しい組織、こういう新しい法律にまだ頼ることはできないのです。

第3番目は新興国です。一番力のある新興国はBRICSの国々です。彼らは非常に速く成功しているわけです。どんどん発展している国々です。だから、彼らは将来には影響力、力を行使できるはずである国です。彼らもこういう気分はすでに共有しているのです。しかし、国際的な協力によって、共通の将来をつくっていくという実際の経験、ドイツ、日本などと協力して実績を上げた経験がまだ、あまり彼らにはありません。だから彼らは、新しい世界の秩序と一緒に作る道を、いま始めたばかりなのです。これからなのです。

### 潜在的脅威に日独がともに立ち向かえ

私たちがこういうリスクに立ち向かっている状況にいるとき、どこに頼ることができますか。誰が助けてくれるのでしょうか。

最初の結論ですけれども、ドイツも日本もグローバル化への依存度が高い。つまり社会や世界がオープンであることで、利益を得ているわけです。それを人々もよくわかってほしいです。だから自分の国の社会がオープンな状況、開放された状態を維持しなければなりません。さらに、世界中の開放性も維持しなければなりません。私たちは自分たちの社会も、世界も、グローバルなリスクから守らなければなりません。なぜなら、開放性がいまだ揺らぎがちなのです。はつきりとみなければなりません。ドイツも日本もそれぞれ部分的に国際社会のグローバルな発展に影響がありますけれども、全体としての影響力はあまり大きくありません。だから自分たちだけで必要な取り組みを進めることもできません。

具体的な例を挙げたいのですけれども、シリア問題を一度考えてください。毒ガスの問題で、ロシアのラブロフ外相が非常に効率的な提案を

しましたでしょう。その土台の上に、きのう、ニューヨークでアメリカとロシアの間に合意ができたわけです。もしもドイツの誰か政治家がラブロフ外相と同じ提案をしたならば、成功をしたでしょうか。疑問を抱いてよろしいと思います。

では、これから進む道はどうあるべきでしょうか。いままで通り続ければ、リスクはまだ存在し続けます。それは潜在的な脅威です。それを私たちは望まないのです。どうすればいいですか。論理的に結論づけるならば、ドイツと日本がともに追求する戦略をつくるようになるでしょう。これは論理的な結論ですけれども、実際は複数の理由から、不可能でしょう。

その理由は何でしょうか。

### 日本は東アジアでの立ち位置を鮮明に

一つは、最初にちょっと言いましたけれども、両国ともそれぞれ異なった地域の環境において、異なった問題に直面しているからです。というのは、ドイツの一番重要な課題は、もちろんEUです。EUのこれからの発展です。ユーロ危機を解決するとか、そういう複雑な問題の解決のために多大な政治的エネルギー、構想（戦略策定）のためのエネルギーをつぎ込んでいるわけです。そしてEU以外にもドイツのすぐ近くに大きな問題があります。それはもちろん中近東です。中近東地域には、シリアなど、アラブの春とか、いろいろな問題が起こっていますから、こういう問題をみなくてはなりません。

他方、日本にとっては、もちろん東アジアにおける自国の立ち位置を決め、さまざまな関係のネットワークを発展させていくことが重要だと思います。

その中で一番重要な問題は中国です。予測が難しい動きをみせている中国。不透明な中国。同時に世界中で勢力を拡大させている中国です。その中国への対応が日本にとって最重要課題でしょう。さらに日本には中国以外に北朝鮮の脅威が存在しているわけです。

そしてもう一つの非常に重要な要素があります。それはもちろん伝統的なアメリカとの関

係です。TPPなど経済分野の関係。それと太平洋地域にむけたリバランシングという新しいアメリカの政策などの安全保障分野の関係もあります。対米関係に相当政治的エネルギーを使っていくことが、日本にとっては必要です。

両国がともに戦略をつくれない理由はもう一つあります。それは両国ともに政治的エネルギー、財政的資源をほかに回す余裕がないほど国内の問題を抱えているということです。というのは、両国の社会の高齢化、また教育制度の質の低下、また偏狭的・排他的な物の見方の広がり、そして、これまでどおりの相対的高福祉が維持されることへの国民の期待などでありま

### 欧州で成功した多国間アプローチ

つまり、個人、国ともに現在の相対的な高所得水準を維持できるという期待なのです。それは国、政府にとって、非常に重要な課題です。遠い外国との協力よりずっと重要な課題です。

それでもさっき言ったとおり、グローバルな脅威が存在しています。解決しなくてはなりません。

こういうことを考えますと、私がドイツ人として、ヨーロッパ人として、最初に考えるのは、多国間のアプローチです。それはわれわれヨーロッパ内で成功したアプローチですから、当然だと思えます。多国間のアプローチをとるしかないと思えます。

ただ、それはどのような枠組みで行われるべきでしょうか。具体的に言いますと、超大国を当てにするわけにもいかず、重要新興国(BRICS)も当てにできない。そして国際機関も、むしろ支援される側にあります。だから難しいのです。

私がずっと前から日本とドイツの状況を見て、よく考えたことなのですが、そういう状況において似たような立場に置かれた別の国々、つまり中規模国(ミドル・パワー)との戦略的な調整をもっと密接にできないものだろうかと思えます。これ以外に、私に可能性がみつからないのです。こういうミドルパワー。日

本もミドルパワーですよ。ドイツも中規模国です。ほかにはどういう国があるでしょうか。それは欧州の主要国です。イギリス、フランス、イタリアなど。また世界中をみますとメキシコがそうです。カナダ、韓国、オーストラリアもそうです。こうした国は少なくないです。彼らはみんなグローバル化への依存度が私たちと同じように高く、超大国ではない。もう一つが重要ですが、価値観が似ている。価値や利害関心を相当程度共有している国です。また、相当程度の国際的影響力を有している国々でもあります。彼らとの協力を考えるべきだと私は思っています。

彼らの存在は、他国との相互依存の中で支えられています。しかし同時にこれらの国々は、相互依存と主権維持との間、またグローバリゼーションとリナショナルリゼーションとの間、また自由市場と新保護主義との間を揺れ動いているようにみえる国々でもあります。

### ミドルパワーは利害の相違乗り越えよ

このような中規模国(ミドルパワー)がそれぞれの地域、そしてそれぞれの内政から生まれる利害関心の違いを超えるべきです。この違いは事実です。先ほど言いましたけれども、一番重要な優先事項が異なるという問題がありますけれども、一度この違いを超えて、長期的に共通の目標をともに追求すべきだと思います。そうした協力への関心が、実際にこれらの国々において果たしてどれほど大きいのか、と考えるべきだと思います。

現実的な可能性は、新たな「G何とか」をつくることではないのです。協力の最終形態をあらかじめ決めたりせず、こうした中規模国同士の戦略的な調整をとりあえず始めてみることでしよう。こうした協力は、相手国の数や政治的な目標に最大限の柔軟性を持たせて初めて機能すると思えます。適宜、参加する国を入れかえ、適宜、個別に目標を設定しながら協力を進めるのです。

私の国・ドイツ、日本、そしてそのほかの中規模国が、こうした柔軟な条件のもとで共通の

政治を試みることができると思います。そうであれば、これは最先端の外交だと言えると思います。また、解体しつつある国際秩序の中において、自国の利害や価値に先進的な形で向き合うことだと言えると思います。

このような協力を進めるに当たっては細心の注意を払う必要があります。常に変化し続ける条件のもと、泣き言を言わず政治を行う覚悟が必要となるでしょう。

もう一度シリアに戻りますけれども、こういう毒ガス問題の外交的な解決は、理想的な外交だと私は思っています。しかし、われわれドイツ人、日本人、中規模国の政治家はそうした提案をしませんでした。しかし、一緒になれば、中規模国が、私の描いたように戦略的に行き先を決めてみれば、こういう外交ができると思います。

## 《質疑応答》

### グローバル化に依存する国が共通戦略を

**司会** ありがとうございます。きょうの大使のお話は、長年の外交官生活で培われた外交哲学というものを披瀝されたというような、大変感銘の深いお話だったと思います。

まず、いま大使がお話しされたことに関連して伺います。中規模国による緩やかな連合ですね。「緩やかな連合」と言っているのだと思うのですが、これには超大国は入らないのでしょうか。

**シュタンツェル** 私たちにとっては、例えばアメリカとの関係は非常に重要です。日本もドイツも、われわれの存在をアメリカとの同盟関係に頼っています。しかし、利害関心をみますと異なる点が多い。同じような価値観や利益の見方を共有する国は、やはりほぼ同じ大きさの国です。

もう少し具体的に言いますと、一番大きな超大国と中規模国との違いは、グローバル化への依存です。われわれは依存度が高い。超大国は、

グローバル化はもちろん役に立っているけれども、われわれほど依存していないのです。グローバル化が進まなくても存在できるわけです。だからアメリカにはアイソレーションイズム (isolationism) という概念があります。われわれにはそれは不可能なのです。だからこういう点、グローバル化に依存する点を共有している国と一緒に戦略をつくるのが一番簡単だと思います。

**司会** その場合は、全ての国が集まるのではなくて、個別の問題で数カ国が集まって協議をするという形式なのでしょうか。

**シュタンツェル** そうです。非常に緩やかにするほかに方法はないですね。

**司会** リーダーみたいな国は必要ないのですか。

### 戦略的な協力は自然なこと

**シュタンツェル** それは必要ない。もう少し根本的に言いますと、さっき言いました多国間の概念は、私たちヨーロッパ人にとっては自然なことです。私たちの経験では、多国間で解決を求める過程は、やりやすいのです。私たちにとっては、多国間政策はあまり困難なことではないと思われます。

**司会** 先ほど高齢化の問題とか教育の問題とかということをおっしゃいましたが、そうすると中規模国のこのグループは、G20ではなくて、何と名づけたらいいのでしょうか。あるいは名前をつけないほうがいいのか。

**シュタンツェル** つけないほうがいい。

**司会** その国々が扱う問題は高齢化とか教育とかというもののほかに、政治、安全保障、軍事といったような問題ももちろん対象になる

わけですね。

**シュタンツェル** もちろん入っています。もう少し言いますけれども、「G何とか」をつくらない背景は、同じ利害関心を持っている、同じ価値観を共有している国にとっては、協力するのが自然なことであるはずですが、実際はそこまではまだ行っていません。でも、かなりたくさんを共有していますので、戦略的に協力するのは自然なことになると思います。

**司会** この問題に関して会場からご質問があるかもしれませんが、いかがでしょうか。どうぞ。

**質問** もうちょっと具体的な例を出していただけますでしょうか。例えばシリアの問題で、こうした中規模国が集まって何らかの決議案を作成して提出するとか、そんなことを考えていらっしゃるのでしょうか。

#### 思想の近い国同士の協議は影響力が強い

**シュタンツェル** 私は外交の現実の立場から考えているわけです。こういうシリアのような、私たちにとって脅威である問題が起こると、自然に、一番思想の近い国同士に相談すれば、影響力が大きくなる、強くなってきます。例えばロシアのラブロフ外相のようなアイデアが出てくると、その国同士が一緒になって提案をシリアに、アメリカに、国連にすることができます。そうしたら影響力が出るわけです。いまのところ、私たちのような国にいくら構想力・想像力があっても、何にもなりません。しかし、脅威が存在しているわけです。シリアのような問題は解決すべきです。もしもラブロフ外相がこの提案をしなかったならば、シリアの状態はよりひどくなってきたかもしれません。

**質問** いまの話に関連して、具体的に日本とドイツが、いま、あるいは近い将来、そういう

戦略的に提携できるテーマという何か、具体的なことがあるのでしょうか。

#### 日独間で有益な温暖化防止での協力

**シュタンツェル** 先ほどいろんな問題を言いましたけれども、例えば温暖化です。ドイツと日本は国の大きさも、産業レベルも同じように高いです。だから、両国はこの温暖化の脅威を同じように感じています。しかし、両国がそういうことをいま議論する場合は、国連の会議とかそういうような大きな、参加者の多い場に限られています。両国は意識的に共通の戦略をつくることはありません。もちろん互いに相談するわけですが、こういう大きな会議の中でいろいろな国と相談しているだけの話です。温暖化のような問題に立ち向かっている場合は、両国にとって、大きな脅威だから、一緒に戦略をつくるほうが役に立つと思います。

**質問** ヨーロッパの統合はまさに、国の違いはありますが、中規模で、しかも民主的で、政治、文化、経済を含めて、価値を共有していると思うのです。

日本はそういった意味ではヨーロッパと価値観を共有しているし、規模も似ていると思います。日本とヨーロッパが絆をもっと深めるためにはどうしたらいいのか。例えば日本とドイツが自由貿易協定（FTA）を強化して、それをコアにして、安全保障の問題であるとか、グローバルな温暖化の問題等について推進役になっていくということは可能なのでしょうか。

もう一つ、例えば日本と中国、ASEANなどの関係について、EUがもう少し仲介役をしていくとか、自分たちの経験をアジアに生かしていくというアドバイス役みたいものをするようなことは期待できるのでしょうか。

#### 日本は中国より東南アジアと協力を

**シュタンツェル** FTAのことは、非常によい例だと思います。輸出、また資源の輸入に依

存しているということは、結局、世界中の自由貿易に依存しているということです。ドーハラウンドは、数年で成功するはずはありません。そのかわりに自由貿易をどこで推進することができますか。それはもちろんFTAを通じてです。だから、EUと日本の間はこのような自由貿易協定が必要です。日本はことしの秋、6つの自由貿易協定を交渉していると思いますが、その多くは日本と同じような中規模国との間の協定だと思います。それは私が言っていることの非常によい例です。中規模国の間で利害関心を共有している場合は戦略を一緒につくるべき。自由貿易の場合は、私たちはいまもうすでにそうしています。もちろん、こういう協定をつくるのは簡単ではありません。それでも目的として必要です。だから私が言っている中規模国の戦略的な協力は、もうすでにあちこちに存在しているのです。

もう一つは、ロシア、中国、ASEAN。私たちにとってロシアとの協力は必要なことです。いろいろな問題があっても大事です。それは簡単ではありません。10年前には、ロシアもEUの加盟国になればいいのではないかという議論があちこちで出てきましたけれども、こういう大きな国をEUに入れると困難が多過ぎて、EUそのものが存在できないという反応が優勢でした。

日本にとっては、中国が多分同じような問題をもっています。大きな国、経済的に力を持っている超大国との協力は難しい。しかし、東南アジアの中規模国との協力は、よりしやすいと思います。だから、日本にはASEAN諸国との協力は自然な道だと思います。一番簡単に実現ができる協力の一つだと思います。

### ドイツはEUに利益もたらすエンジン

**質問** ヨーロッパの経済からみて、ドイツはある意味スーパーパワーである。そのほかの、中規模国とかなり違うのではないか。アメリカの世論調査でことし、とてもおもしろい結果が出ました。「あなたの国の経済状況はいいですか」という質問に対して、ドイツでは過半数、

それも75パーセントの人が「いいです」というふうに答えている。これはヨーロッパでドイツだけです。

それからもう一つは、ほかの全てのヨーロッパの国で、「最も重要な問題は何ですか」という質問に対して、回答は「雇用」なのです。ところがドイツでは、雇用ではなくて「格差」というのが一番上に来ています。それはドイツの場合は、労働市場の改革によって失業率が非常に下がってきている。それはいわゆる非正規雇用が拡大したということと表裏一体なのです。

国民の認識がドイツだけはほかのヨーロッパの国と違う。その場合に国民をどうやって説得するのでしょうか。

**シュタンツェル** 非常に興味深いと思います。ヨーロッパ内にはいつも経済的なエンジンの役割を持っていた国がありました。時にドイツでもありましたけれども、いつもドイツだったわけではありません。10年前は、ドイツはEU内で病人だというのがみんなの認識でした。私たちは、いまはEU内のエンジンだと言っている。スーパーパワーでもないけれども、中規模国です。私たちはエンジンです。しかしそれは第一に、EUの他の加盟国の豊かさもだんだんと水準が高くなっていくことを意味します。

第二は、いま、経済危機に立ち向かっている国々、EUの南にある国々に一時的に支援できる国はドイツです。それは、EU内の連帯の必要性ゆえです。ドイツ人はいま、自国の経済状態がいいと思っています。格差の問題は残っています。経済が急によくなる場合、どんな国でも一時的に格差が大きくなっていくわけです。それは日本でも、アメリカでも、どこでもそうですけれども。その後の政府の仕事は、この格差をなくすことです。

もしもドイツ人がほかのヨーロッパ人と同じように、失業などを心配したならば、EU全体の本当の危機になると思います。いま、そうでないのは、ドイツ人にとってよいことですし、ほかのEU加盟国の利益にもなります。解決策はその次です。リーマンショックのときからず



つと解決策を探ってきました。そしてある程度まで進歩をみた。例えばバンキング・ユニオンについて議論をしているわけです。ステップ・バイ・ステップの過程です。

私が4年前に日本に来たとき「来年はユーロという通貨がまだ存在していますか？」と聞かれました。いまは、1ユーロは135USセントです。かつてよりずっと強くなってきていて、やはり克服したと言えると思います。でも、突如の成功ではない。ステップ・バイ・ステップの成功だと思います。

### 具体的ビジョンにとらわれず前へ進め

**質問** EUというのは、EU一つで中国、アメリカと対抗するスーパーパワーではなくて、実はアライアンスということなんでしょうか。

温暖化の問題に関連して、日本とドイツとは再生可能なエネルギーの問題などで協力できるということなのでしょう。

私が大使に最初に会ったのはイラク戦争の直前でした。ドイツはイラク戦争に反対していました。日本はアメリカを支持していました。やや対米一辺倒に見える日本がミドルパワーの連携というほうに変わっていきけるのか。そういう兆しをみつけられているのでしょうか。

**シュタンツェル** 中規模国の協力について、こういう緩やかな協力を簡単に想像できる理由の一つは、EUはこういうモデルのない協力をずっと経験してきたからです。私たちが経験しているのは、前に行くために、最初に具体的なビジョンがなければならないという概念から外れて、新しい道に行ったからです。歩きながら行き先を決めることです。リーマンショックの後のヨーロッパ内の政策がよい例だと思います。もちろん、リーマンショックのすぐ後にいろいろなアイデアが出て、いろいろな人がビジョンを持っていました。具体的な政治家の協力の実際の結果は、ビジョンから離れていました。やはり歩きながら決めるということです。

そしてEUは、こうした唯一の存在だと考えていい。だから、EUの加盟国の中のこれから

の関係は、まだ具体的に説明することはできません。知ることもできません。EUのこれからの拡大、統合過程がどんなふうに行くか、まだ誰も知りません。私たちの首相が2年前想像したことは、そのときは適切であったが、その後のEU内の発展が違ってきたから、ステップ・バイ・ステップで修正しなければならない。だからEUという唯一の存在は、新しい協力の仕方を発展させてきたと考えていいと思います。

### 難しい安全保障での協力

もう一つは新エネルギーのことですね。これも非常によい例だと思います。ドイツもちろんエネルギーは、第一に、輸入に頼っています。第二に、従来型のエネルギーを使いますと温暖化がよりひどくなってくるわけです。この両点の解決先をみつけなければなりません。

新エネルギーが発達することは、そういう問題の解決策であるかもしれません。ドイツはいま、そう思っています。8年の間に原子力使用を完全に停止するわけです。いまのところ、ドイツの消費する電力の4分の1は、もうすでに新エネルギーでつくった電力です。この道が続けますと、2022年、原子力発電所を停止する年、そのときまで、私たちは35~40パーセントは新エネルギーができています。これはもちろん温暖化の対策の一つです。こういうことをほかの中規模国と一緒にすれば、より効率的だということは言うまでもないと思います。日本はもちろん新エネルギーがいっぱいあります。

安全保障面で協力するのは難しいと思います。なぜならば、自分の国民が死ぬかもしれない、そういう決定をほかの国に任せるのは難しい。自分の国民に対して説明しにくい。NATOや日米同盟などよい同盟であれば、それは可能です。ただ、こういう緩やかな協力の状態では、安全保障政策をほかの国に任せるのは非常にしにくい。EU内でもまだそれは一番難しい問題だと思います。

**質問** 安倍首相が国連総会演説で安全保障理事会改革への意欲を示しました。先ほどのお

話では、ドイツ外交にとって国際機関の比重は下がっているのですが、ドイツとしてはもはや安保理改革にそれほど熱心に取り組むということはないと解釈してよろしいのでしょうか。

2点目。やはり極東アジアとヨーロッパの安全保障環境が全く違いますので、日本としてはおそらく対米関係、アメリカとの二国間関係が外交の基軸であることは近い将来変わらないと思うのです。大使のような発想がドイツから出てくるというのは、やはりヨーロッパの安全保障環境が非常にいま良好である、ドイツは、かつては敵国に囲まれていましたけれども、いまや周辺国は全部友好国と、そういった状況が関係していると思いますけれども、いかがでしょう。

### 「秩序無極状態」ゆえに弱まる国際組織

**シュタンツェル** ドイツと外交関係、あるいは友好関係にある国々はたくさんありますけれども、他方私が先ほど言いました中近東までは遠くないのです。そこは安全保障問題がいっぱいあります。だからヨーロッパにおいても安全保障の問題に立ち向かっています。リビア、シリア、アラブの春、イランの核兵器問題は日本よりずっと近いのです。私たちにとって安全保障政策も重要です。先ほどの質問にも答えましたけれども、近い将来、安全保障政策はこういう中規模国の協力の一つの要素になり得ない。

アメリカとの協力が必要です。国際秩序の解体についても話をしました。国際秩序無極状態が現実だから、国際組織も弱くなってくるのです。だから毎年新しい国際組織をつくるわけです。それは非常に残念です。もちろん、うまく働いている国際秩序があれば、それは最高です。それを望んでいる。ですから国際秩序、国際組織を直すために協力しなくてはなりません。だからG4の協力はまだ必要。もちろん、国連は国際組織の中で一番重要です。だけど現実をみますと、いまのところは、国際組織はわれわれにそれほど役に立っていません。それは超大国であれ、中規模国であれ、ほかのBRICSであれ、同じ認識であると思います。だからさっ

き言ったとおり、いつも新しい組織ができているわけです。

**質問** 先ほど中規模国との連携ということでも韓国の名前も出ました。残念ながら韓国と日本の間はいま緊張した状況にあります。そこでドイツを模範に、より反省しろという主張が中国とか韓国から出ています。それについてどのような意見をお持ちかということなのですが。

### 日韓は「過去」より「将来」が重要

**シュタンツェル** 30秒で答えられません。しかし根本的に答えますと、韓国と日本は似ている中規模国で、価値観も利害関心も非常に近い。ですから、過去から残されている問題が存在しても、これらを乗り越えることは、そんなに難しいはずではないのです。両国の政治家はそういう問題を解決できると思います。過去から残っている問題よりも、将来の問題やグローバルな問題のほうがずっと重要です。だから結局、韓国と日本の戦略的な協力も必要だと思います。

**質問** 大使は日本勤務がすでにもう3回目です。それぞれの時代をみてこられた。それと先ほどのお話でドイツ、10年前は「ヨーロッパの病人」と言われて、ちょうど私もそのときドイツにいたのですけれども、どん底の時代ですね。失業者もたしか500万ですか。そのドイツが10年でここまで来た。ここまでドイツが来たのに、日本は10年、20年、あまり変わりませんでした。ドイツにあって日本にないものは何か。

それからこれまで3回、それぞれの時代の日本をごらんになってきて、経済の意味で日本は果たしてドイツのようになれるのか。最後に日本をどうすれば変えていけるのかという考えをお聞かせください。

### 成功したドイツ統一のチャレンジ

**シュタンツェル** また30秒では不可能ですので、最後の質問に答えるのは遠慮します。

その前の点ですが、日本とドイツには非常に異なっていることがあるわけです。ドイツは、

戦争の後ずっと、そしてとりわけ冷戦後も大きなチャレンジに立ち向かわなければなりませんでした。

冷戦後、私たちはドイツ統一の仕事をしなければならなかった。同時に、東西ヨーロッパの統合も自分たちの仕事として進めなければならなかった。非常に重要な難しい仕事でありました。もしも成功しなかったらならばドイツ統一がなく、ドイツ内の状況はひどいものになり、紛争になっていたかもしれない。またもしも東西ヨーロッパの統合がうまくいかなかったならば大陸の中心に位置するドイツにとって災難となっていたでしょう。やはりこのチャレンジは非常に重要でした。大変な仕事でありました。こういうチャレンジに立ち向かっていった。解決策を探してみつけなければならなかった。

そして成功したと言っていいと思います。しかし、こういうチャレンジに立ち向かっていったから、政治家も、一般庶民の構想力・想像力も働かさなければならなかった。だから結果として非常に役に立ったチャレンジでした。これがあったから、私たちはいまの状態に達しました。

### 日本のチャレンジは中国だ

日本ももちろん冷戦後の世界を経験しまし

たけれども、何よりもソ連という脅威がなくなりました。日本にとってのチャレンジは多分これからです。それは中国ということです。

**司会** 時間がきたようです。大使の揮ごうをご紹介をしたいと思います。「4年にわたり日本記者クラブにいろいろとご協力いただき、ありがとうございます。フォルカー・シュタンツェル。4年変わらず知行浅薄です」。この「知行浅薄」の意味を説明してください。

**シュタンツェル** 荀子の言葉です。実は日本で外務事務次官をされた方に教えてもらいました。会話の中でよい言葉ではないかと思いました。ちょうど私の気持ちにぴったりですね。「何もかも足りません、何かしても行動も知識も何でも、全部が浅くて薄くて仕方ありません」一生がそうですね。いま定年退職の前でも同じ結論です。広辞苑には確かに載っていません。私は調べました。しかし、たしか「諸橋大漢和辞典」には載っていたと思います。

皆さま4年間いろいろお世話になりました。ありがとうございました。

(文責・編集部)